



N. D. C. 910 728 p 20 cm

子規全集 別卷一

子規あての書簡

昭和五十二年三月十八日

定価 参千八百圓

印刷發行

著者 秋 山 眞 之 ほか

編集 正岡忠三郎

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽二一二一二

電話 東京(〇三)九四五一一二(大代表)

郵便番號 一二二 振替 東京八一三九三〇

印刷所 株式會社 精興社

製本所 大製株式會社

本文用紙 三菱製紙株式會社

©正岡忠三郎 一九七七年

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

0395-417314-2253(0) (子規)

Printed in Japan

子規全集

別卷一

子規あての書簡

講談社

監修

編集

正岡忠三郎

服部嘉香

大岡昇平

久保田正文

司馬遼太郎

和田茂樹

ぬやま・ひろし

蒲池文雄

編集製作

講談社文藝局

装幀

講談社ブックデザイン部

目次

秋山眞之	………	二
淺井 忠	(默語) ……	四
淺水南八	(又次郎) ……	九
天岸一順	………	三〇
天草種庚	………	三
天田愚庵	(五郎) ……	三
五百木飄亭	(良三) ……	四
石井八萬次郎	………	六
石井露月	(祐治) ……	六
石川鷺洲	………	六
一本松 啓	………	九

伊藤松宇	(半次郎)		三
乾 狙 醉	(眞澄)		六
井林廣政			六
今川虛空	(氏嗣)		七
今成無事庵	(文平)		六
浦屋雲林	(寛制)		〇〇
大久保愼二			〇一
大嶋梅屋	(嘉泰)		〇三
太田正躬	(柴洲)		〇三
大谷是空	(藤治郎)		〇五
大原其戎	(澤右衛門)		一〇
大原其然	(林三郎)		一七
小川尙義			一七
岡野知十	(敬胤)		一九
岡村恆元	(三鼠)		二三

小此木信一郎		二三
片山桃雨		二四
加藤拓川		二五
加藤安太郎		二七
河東靜溪		三八
河東 銓		三八
河東碧梧桐		三九
菊池謙二郎		四〇
菊池壽人		四〇
陸 羯南		五一
栗田淳綱		五一
黒田勝〔女〕		五二
幸田露伴		五九
幸堂得知		六〇
古島一雄		六一

(古洲)

(鈴木利平)

(成行)

(實)

(馬革齋)

(仙湖)

(秉五郎)

(可全)

(文魔)

(恆忠)

(久)

權藤〔震二〕		二六二
佐伯蛙泡	〔傳藏〕	
佐伯政直		二六三
齋藤綠雨	〔賢〕	
佐々田八次郎		二六九
佐藤紅綠	〔治六〕	
佐藤肋骨	〔安之助〕	
寒川鼠骨	〔陽光〕	
島崎靈子		二九〇
清水則遠		二九一
下村牛伴	〔純孝〕	
釋 一宿	〔佛海〕	
勝田主計	〔明庵〕	
仙田重邦	〔土佛〕	
〔園田〕重賢		二三八

〔高川〕信一		三〇
高濱 虚子		三三
(清)		
武市 庫太		四四
(蟠松・雪燈)		
武市 守衛		四八
竹村 鍊卿		四九
(鍛)		
薦 太郎		四二
豐島 昌義		四三
(天外)		
鳥居〔素川〕		四四
(赫雄)		
内藤 鳴雪		四四
(素行)		
永井 英次郎		四五
(破笛)		
中根 重一		四五
中野 逍遙		四六
(重太郎)		
中村 不折		四九
(鉾太郎)		
夏目 漱石		四六
(金之助)		
新海 非風		五一
(正行)		

西 芳 菲	(松二郎)		五五
西 原 義 任			五〇
二 宮 孤 松	(熊次郎)		五二
野 口 寧 齋	(一太郎)		五三
服 部 嘉 陳	(楠谷)		五六
林 江 左	(和一)		五七
藤 井 乙 男	(紫影)		五三
藤 野 磯 子			五五
藤 野 古 白	(潔)		五六
藤 野 洋 々	(漸)		六八
不 破 信 一 郎			六八
細 井 岩 彌			六〇
松 田 甲			六四
松 田 半 粹	(芳次郎)		六五
松 浦 政 泰			六八

道山壯山	(芳種)		六六二
三井〔駒治〕			六三〇
水落露石	(義一)		六三一
三並良			六四一
宮崎梅塘	(國太郎)		六四五
森鷗外	(林太郎)		六四六
森河北	(莊之助)		六四八
森猿男	(廉次郎)		六四九
森松南	(知之・貢)		六五〇
物集高見			六五三
桃澤茂春	(重治)		六五三
矢ヶ崎奇峰	(榮次郎)		六五四
柳原極堂	(正之)		六五五
山川信次郎			六六〇
山崎馬骨	(精一郎)		六六二

山田鹿次郎		六六三
山田烈盛		六六四
山寺梅龜		六六五
山本忠彰		六六九
與謝野鐵幹		六七〇
〔吉野〕左衛門		六七〇
渡邊香墨		六七一
渡部正綱		六七二

參考資料		六七五
------	-------	-----

解題	和田茂樹		六八五
解説	正岡忠三郎		七二三

Naval Collage
Oct 28th

My dear
For this afternoon
I received your letter
and now I hasten
to reply it.
At leisure I in-
quired all my school
mates about the best
preparation school
for our collage, and
the opinions is several.
One of them said, the
Kondo-zuku is improv-
ing its regularity of
instruction lately,
& it will be a best
preparation school for
Naval Collage. Some
one say, but that
zuku is not good for
the English study,

〔秋山眞之の子規あて英文書簡〕

明治〔20〕年10月28日 〔封筒缺〕

1
1

秋山眞之より

Naval Collage
Oct 28th

My dear

In this afternoon I received your letter and now I hasten to reply it.

At leisure I inquired all my school mates about the best preparation school for our collage, and the opininons is several.

One of them said, the Kondo-zuku is improving its regularity of instruction lately, & it will be a best preparation school for Naval Collage. Some one say, but that zuku is not good for the English study.

And one of them says, Eiwa-gackō is very good for English. But now I say, it is not best preparation-school to he successful in the entrance examination of our collage,

but only the study. The mathematics is most difficult among the all, therefore one who wish to enter this college must take a heavy study of Arithmetic & Algebra.

The English is the next.

Our new caddets came from several parts. Some of them came from Kondō, some came from Kyoritsu-gackō or Seiritsu-gackō, and some from Awoyama Eiwa-gackō.

Every school is much enough for preparation of the Naval Collage, and need not to chose best school.

If you have not yet promised to join your friends elsewhere, I shall be delighted to have you with me in coming Sunday's after-noon, and will tell you many that the letter can not tell.

Your sincerely
S. Akiyama

〔譯文（編者譯）〕 拜復 本日午後貴翰落筆急ぎ返書認め候。吾校への最上の予備學校につきては、諸友に折々暇に任せて相尋ね候。其に就き諸論相分れ候。一人の曰く、近藤塾は最近教授法を改良致したり、されば海軍兵學校への最上の豫備學校ならんかと。されど一人は彼の塾は英學には良からずとの反論もあり。又、一人は、英和學校こそ英語に良からめと言ふあり。されど、余が言はんには、吾校に入らんとする入學試験に成功せんとするには、それは必ずしも相應しからず、唯學習あるのみと。就中、數學は至難の者にして、吾校に入らんと欲せば、幾何學・代數學に重きを置きたる學習を爲さざる可からず。英語は次なりと。新入兵學校生徒は、所々方々より來れり。近藤塾、共立學校或は成立學校並びに青山英和學校其れなり。何處の學校たりとも、海軍兵學校に入る用意としては充分なり。最良の學校を選ぶ要は全く無き者に候。

貴兄にして友人に未だ何なりと約束せざりとせば、來る日曜日の午後拜眉賜はらば嬉しく存じ候。書狀に盡さざる所、その節委細可申上候。

十月廿八日

恐々謹言

正岡常規様

秋山眞之

〔秋山眞之の海軍兵學校在學は、明治19・10・30と23・7・17の間。受験希望者のために、子規が豫備校の是非を尋ねた返事なので、入學後、やや事情に通じてからの返信と思われる、明治20年と推定〕

明治24年正月元旦

〔はがき〕

2 2

Monsieur T. Masaoka 18. Masago machi
Hongô ku Tokio Japon/ Via Post Sail
S. Akiyama Constantinople A. I. J. M. S.
Hiyei.

東京本郷眞砂町十八番常盤舍内 正岡常規君

〔消印〕 BRITISH POST OFFICE/A/JA 7/91/

CONSTANTINOPE

〔同 2〕 SUEZ/13 A 91/ARRIVE

〔同 3〕 YOKOHAMA/21/FEB/1891/JAPAN

〔同 4〕 武蔵東京／廿四年二月／二十一日／郵便

常盤舍内諸君へ

謹賀新禧

黒士坦丁堡迄來りた

れトモ別ニ驚ク程の者なし

世界ハ廣クして餘程

狹ク御坐候

廿四年正月元旦

S. Akiyama Constantinople
H. I. J. M. S. Hiyei

〔秋山眞之は、明治23・7・17海軍兵學校卒業、海軍少尉候補生を命ぜられ、比較に搭乘。同24・6・4比較から高千穂に轉じた。地中海からの賀狀。スタンブに當時の通信狀況が偲はれる。H. I. J. M. S. は His Imperial Japanese Majesty's Ship の略(防衛廳防衛研修所戰史室海老原惇氏の調査による)〕

淺井忠（默語）より

明治33年5月20日〔ホトトギス第三卷第九號〕 13

拜啓、近頃御病氣如何、好時節に向ひ御快方の事と奉存候。小生不相替健全、乍憚御安慮被下度候。博覽會此頃漸く大略整頓仕候。美術館の繪畫、佛國十年以來の名作を陳列して大に世界に驕らんとす、諸外國又競爭日本の國畫及油畫其間にはさまれ實に顔色なし。其前に立留るもうら恥しく候。素より美術館に入りて恥かき候事は豫め期したる事なれど、斯くはかり萎れかへりたる有様を目の前に見るは情けなき次第に有之候。油畫の畫風、概していへば、前世紀の者は曇天に向ひ當世紀の畫風は晴天に向ひたる傾きありて、總て明るく晴したる有様に有之候。畫風の千差萬別なる、あまり奇を好みて文人畫的なるあり、又美術院的なるもあ

りて、何が何やら畫いた人も知らざるならんと思はるる物さへ有之候。彩色の研究は確に當世紀に大進歩を爲したる様相見え候。然して其弊のある所も亦相見え候。山水畫の進歩は年々著しき様も相見え候。平易なる畫題をとらへて洒落なる無邪氣なる山水畫も増加せし様見え候。英獨諸國も大抵佛國風に化せられたる様相見え候。仔細に熟視すれば、各異りたる所は有之候得共、以前の如く特有を顯はし居らざる様に有之候。獨の着實なると英の色の濃きはよく見れば確に分別有之候。伊太利は退歩、露と米は中々強敵に有之候。甚だ不思議なるは油畫の變化極りなきことにて、日本油畫の皆同一流儀の如く見えて色の枯瘦したるは先づ置くも、日本畫の四條と狩野の絶対に反對なる畫風も此場内に入りては皆一流の如く無味淡泊にして白紙に少形を止めたる様見え候もをかし候。總じてたつぶりしたる墨畫が一番目を引き、細かき彩色畫の如きは少しも目に止らず、日本畫には彩色なしと云ふても宜敷候。日本の美術は、工藝家の通弊として、大體の粗

織に甚だ不注意にして、細かき筆遣ひ細かき仕事を自慢して、女の頭の髪の毛の線がきとか、象牙彫りの魚の鱗とかいふ者に骨折りに四疊半の座敷で賞翫せんとするものを、五間や六間離れて見ては何が書きあるや更にわからず。少くとも十間以上離れざれば品物が分明ならざる様な大膽の仕事の數千もある中に入り込みせられたる其咎と申すべし。陶器、織物、室内裝飾に至りては只あつけに取られ申候。八九分は皆日本意匠を取りて日本品よりは遙に上手に仕事され、茶人の涎を流しさうなるもの、骨董屋の堀り出し相なるものより、埃及、支那、日本を加味して自由自在に應用變化したる者、着眼の點可恐事に候。フォーストリー、ホンガリー、ノルウェー、デンマーク等の東洋的室内裝飾の溢くして凝りたるには實に一驚を喫し候。佛國自慢の工藝列品は未だ整頓不致、アンバリード^{アンバリード}右方は諸外國の列品にして、左方は佛國の諸列館なり。整頓の上は又た膽玉をつぶすことゝ存居候。クシャ／＼的、金ピカ的のものは獨逸、露西亞の列品の一部に在るのみ

にて、餘は皆ノロリとしたる東洋的曲線の形式に法りて、模様に至りては純然たる日本畫か亞細亞的裝飾のみ競争して應用したる様見えたり。色彩は多くぢみに傾き、鈍き鼠色か、鈍き緑か、鈍き紫か、シツトリと沈んだる色多し。噪々しく目を射るやうな派手なる時代は過ぎ去りたりと見え申候。織物の模様に至りては、中村不折をして泣かしむるやうなもの多く、ピカ／＼と絹の光りたる様なものでなく、木綿物ににぶ色を以て不器用に埃及的模様を施したる、いふに言はれぬ味ありて、旅で買ひ度きもの斗り澤山にして只涎を流し居り候。五六尺の小さき織物でも百五十法以上のもの多く、手も出しかね居候。

之に反し日本の出品には實に嘔吐を催し候。諸外國のスツカリ整頓したる真中に挟まれ、未だ荷ときもせず明箱許りにて、少しすら出し居るものは相も不替横濱仕入れの義經辨慶などの赤畫を只無暗矢鱈に透間なくかき散したる者多く、蒔畫に至りては勸工場の安物の仕入物の如く、形と模様と總て能く／＼不揃に且つ